
私の人生

M、O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の人生

【Nコード】

N2926C

【作者名】

M、O

【あらすじ】

姉の不注意で僕の人生が180度変わってしまった。その後家族との問題、友達との問題と色々なトラブルが起きてその中で僕が味わった苦しさ、悲しさの話です。

僕は現在33歳の男です。

これから僕の人生劇場をお話したいと思います。
皆さんもし良かったらこんな僕に付き合ってください。

それは僕が高校2年生の時のお話です。

父親たちが父親方の法事で田舎の鹿児島に帰省するので僕が預かってたジュエリーの箱を父親達に渡しました。

ジュエリーボックスと書きたかったのですが単なる箱だったのでスミマセン。

父親と母親がジュエリーの入った箱から何個か付けていきました。
その時に僕は高校まで送ってもらうことになっていたのでそれは家事手伝いをしていた姉に預かってもらってそのまま出発しました。
僕は無事に近くまで送ってもらい父親たちは空港に向かいました。
その時はまさかあんなことになるとは思わなかったから「僕も鹿児島に行きたかったな！」と思っていました。

それで学校が終わって家に帰りました。

次男の嫁のMKと姉Hと僕と三人でテレビ見たりご飯食べたりして楽しく時間が過ぎていきました。

多分2泊3日の予定だったと思うので僕達はその間父親の怒鳴り声を聞かないと思うと天国でした。

しかしこの後に事件が待っていました。

父親たちが帰ってきて付けていったジュエリーを戻すことになり姉Hにジュエリーの箱を持ってきてと言いました。

姉Hは探しているようでした！

僕達はびつくりして「どこに置いた？」と聞いたけど本人は「どこに置いたか分からない？」と言いだしたのです。

母親が「ちゃんと保管しといてな！と言ったやん」と言い僕たちもみんなで探しました。

その時に居た次男の嫁HKにも聞きましたが知らないようでみんなで「どうしよう?」と言いました。

少ししてみんなが法事に出た次の日だったと思うけどゴミの日があつてもしかしたら捨てたかも?と話が出ました。

でもそんな嫌な事は考えなくなかったので何日もかけて家中 家具の後ろから棚の上も隙間という隙間は全部探したけど見つかりませんでした。

それでも次の日もその次の日も学校から帰ってきて時間間のあるときみんなで探しました。

でもやっぱり見つからず「やっぱりゴミの日に捨てた」という可能性が高くなりました。

確かに姉Hがだらしなくなければ紛失しなかったのですが僕ももっと高級な箱とかに保管してれば無くなかったとか僕がちゃんと保管してから学校に一人で学校に行つてればこんなことにならなかったと思います。

だからばくも色々考えました。

占い師のところに行つたりもしましたしゴミの清掃局にも電話して聞きました。

でもやっぱり駄目でした。

本当に先の見えない暗闇に入った気がしました。

そんな生活が2ヶ月以上続いてみんな精神的に疲れていました。

いつ父親に指輪とか持つて来い!と言われるか分からない不安と恐怖で……

そんな恐怖の生活のしている最中、2回目の事件が起きました!

ほとんどの方は16歳になったら原付の免許を取得したと思うのですが僕は15歳のときに窃盗と無免許で前科があるので普通の人より遅れて免許を取得しました。

僕の家はもととバイク系は禁止の家だったのですが僕は最初に内緒で免許を取得してそれから父親にお願いして怒鳴られながら我慢してやっと許しをもらって原付を買いました。

その時に少しずつ貯めていたお金で新車を買いました。

それで学校に通学したり色々遊びに行ったりと生活を送っていました。

ところがこの頃から家の中で異変が起きました。

少しずつ父親や次男夫婦の態度が違ってきて「変だな？」と思っていたら父親が僕達兄弟をを自分の部屋に呼んで正座させられて「次男Y（兄の名前）の部屋からお金が盗まれてる！」と言い出しました。僕はほとんど聞いてなかったら急に父親が（M（僕の名前）！聞いてるんか！？）と怒鳴りました。僕はどうしてぼくにきつく言うのかなと腹立って一応そのときはそれで終わりました。

それで2日くらい過ぎた時に母親から「父親もYも次男の嫁Mもお金盗んだ犯人はMって思っている」と聞きました。

その瞬間すごくショックで倒れそうになりました。

僕は確かにバイクとか盗んだり小さい頃は万引きとかもしたから仕方ないと思っているけどもう馬鹿なこととはしていないから父親達にも信用得ていたからH（次女）が無くした家の財産ともいえる貴金屬を僕が預かっていました。

当時は二世帯住宅に住んでいたので僕は腹立って僕が原付を買った残りのお金を持って次男夫婦の部屋に投げつけてやろうと思って行こうとしたら母親が「何十万盗まれた」と聞いて驚きました。

確かに僕の原付は15万くらいしたけどそれは僕が自分の通帳から下ろして買いに行っただけであってその盗まれたお金だったらもつと高額のを買っていました。

でもそれから何日かして兄夫婦たちは二世帯から引越して父親が持っていた団地へ引越して行きました。

でも僕の地獄はそこから始まりでした。

朝学校に行くのにキッチンでご飯食べていたら父親が僕の顔を見るなり挨拶の代わりに朝から怒鳴られました。

「お前みたいな野郎は生きている価値ない」「この盗人野郎」「お前みたいな奴はお父さんの子じゃ無い」とか何十分の怒鳴られてい

ました。それが毎日辛くて辛くて泣いていました。

だから学校が一番幸せで嫌なことも忘れられたけど帰りになると憂鬱で帰るのが嫌でした。

でも諦めて帰っている途中で父親の車に遭ったかと思うと突然スピードを上げてきて引かれそうになったこともありました。

家に居たら椅子を投げられたりおトイレに入っていたらトイレを出るまで外から怒鳴られ続けました。

そんな時いつも味方になってくれたのは母親と弟達でした。

あと話を聞いてくれたのは親友のNでした。

僕はこの人たちが居てくれたから生きてこれた気がします。

それでも父親のいびりは止まりませんでした。

毎日毎日怒鳴られ足を蹴られて怖かった！今思い出しても怖さで体が震えてきます。

本当に僕が盗んだなら僕も仕方ないし何されても我慢します。

でも本当に盗んでないしでもそんなこと言っても父親たちは信じてくれません。

だから僕もそれからは疑われる行動も気を付けるようにしました。

友達と居てトイレとかで荷物預かるときも財布だけは持つていつてもらうとか友達の家に遊びに行つて友達がトイレとかで部屋から出るときは僕も一緒に付いて行つて廊下で待つてるといふ事をしました。

そうしないとすごく怖くてまた同じ目に遭うと怖かったしそれを避けれるならと変な行動ばかりしていました。

それだけではなく今でもそれは続いています。絶対何があつても店内ではカバンに手を持っていかないとか財布を出すときもレジの前で店員が見ている前でカバンを触るようにしました。

他人から見たら反対に挙動不審に見えていると思います。

でもそれが僕の頭で考えられる防御方法なのです。

それでもお店から出ると何もしてないのに

店員が勘違いで追いかけてくるんじゃないかな？と後ろを何回も振

り返ります。

本当にあの時は地獄でした。

毎日が怖くて辛くて寂しくていつ父親に殺されるんじゃないかと思
っていました。

あの時に今のような強さを持っていたら少しは変わっていたと思
います。

そんな生活が2ヶ月くらいは続いたと思います。

そんな時3回目の事件が起きました。

姉のHが無くした宝石の中の「金の延べ棒を来週までに出してくれ」
と父親が言いました。母親は僕が学校に行っているので伝えると言
って僕が帰ってくると母親から父親の友達が取りに来るからと聞か
されました。

最後にわらをも掴む気持ちで期限の前の日まで探しました。

でももう何処を探しても家にはありません。

母親は期限の日に出て行くと言いました。

僕はそれに対して何も言えませんでした。

家にそのままだら怒鳴られるだけでは終わること無いし絶対に半
殺しにあつて足腰立たなくなるのは分かっていました。だから何も
言わず我慢しました。

それでその期限の日の朝母親と弟2人と原因を作った姉Hが出て
行くことになり僕は母親に現金あるだけ渡しました。

その時にみんなで泣きました。

辛さと離れたくない気持ちから……

父親が朝の仕事から帰ってくる前に家を出ないと捕まってしまうの
ですぐに車で出ました。

その後少しして父親が帰ってきました。

僕と弟のKZが呼ばれました。

「お母ちゃんたちは何処行つた？」と聞きました。

僕達は知っていたけど「知らない」と言い張りました。

それからすぐに長女夫婦と次男夫婦が呼ばれました。

次男夫婦はあの僕を泥棒扱いした奴らです。

みんなはすぐに家に集合しました。

それでみんなが驚いていて僕と弟も驚いたふりをしました。それから少ししてみんな二人で話したり何処に探しに行く？とか話していて僕が一人になった時に次男夫婦のMKが僕のところに来て言いました。

「あのお金取ったのMじゃなかった」「ごめんね」と……！

僕はそれを聞いた瞬間部屋に行つて号泣しました。

お母さんは僕が泥棒の疑いがかけられたまま家を出ました。

一番最初に知らせたかった。

でも父親達に事情を話しました。

父親たちは驚いていました。

おばあちゃんのところ連絡したり色々探し回りました。

でも結局見つからなかったので僕と弟は安心しました。

見つかる 殺される

そう思ったから……

それでとりあえずその日は学校を休んでみんなで色々話し合いました。

これから家の事はどうする？とか父親の仕事の連絡等はどうかとかそんな話になりました。

僕は出来る限り家事はすると言いました。

安易に考えていたのであとで大変だとは思いませんでした。

父親も自分のことはしてくるようになりました。

僕もこれだったら出来ると思っていたのですがその何日後かに下の弟2人が帰ってきました。

父親達は弟たちに根掘り葉掘り聞いていました。

弟たちも小さいのにそこは話したらいけないと分かったらしく子供の特権「分からない、知らない」を言い続けていました。

でも夜に弟達に事情を聞きました。

母親たちが小学生とかを学校に行かせなかったりすると犯罪になる

とか、二人がいるとどこにも行けないとか生活できないとか家の方が不自由しなくて良いと考えて帰したそうです。

結局母親と姉Hが家を出たままでした。

でもそれからには特に一番下のAが中心で家の中が動くようになりました。

僕は最初は良かったけど日が過ぎることに家政婦扱いでした。

僕は学校から帰る途中に買い物して帰って少しでも遅いと父親に怒鳴られて

お風呂も沸かして弟達が帰ってきたらご飯食べさせてお風呂に入れてその後弟達の学校の準備とかさせられて朝もみんなにご飯食べさせて僕もそのあと学校に行きました。

毎日毎日同じ事の繰り返しで弟たちが何かしたら全部僕の責任にさせられました。

日曜日も弟達の世話で遊びに行けませんでした。

遊びに行ったら何時間も怒鳴られ続けられました。

それが怖くて遊びに行くのも止めました。

学校の課題で帰りに残ってたら学校に電話かかってきて「早く帰って来い！ご飯誰が作るんや！」と言われるし本当にこんな言葉ばかりで申し訳ないけど死んだほうがマシだと思いました。

僕は毎日みんながご飯食べてお風呂に入って父親が帰ってきたら父親のご飯を作り父親にお風呂に入ってもらい上がったら飲み物を持っていったり父親の仕事の話したりと僕の時間はその後夜の11時過ぎからしかなかった。

しなかったら良いと思う人もいるかもしれませんが僕の父親はヤクザよりも怖くて子供でも何ヶ月も殴って動けなくするくらいの人間でした。

僕はその当時高校の2年生で友達とも遊びたかったしアルバイトもしたかったし色々楽しい思い出を残す時期なのに僕にはそういった友達と遊んだとかカラオケも深夜以外行ったことがありません。

一度で良いから太陽の出ているときに友達とファーストフード店へ

行ったり買い物したりしたかった。

その当時の僕は家に帰ると汚い服に着替えて家事をするような高校生でした。

僕はこんなことするために生まれてきたわけではないですし普通の高校生の生活が欲しかった。

1ヶ月くらい過ぎたときに学校に母親から電話がかかってきた。

担任の先生は父親から学校に電話したときに母親たちが家出したからと事情を話していただから僕には電話がかかってきてもつなげないようにと言っていたが先生が僕のことを気にかけてくれて電話をつないでくれた。

それで電話を切った後先生が僕に話しかけてくれて事情を話すと早退させてくれた。

僕はすぐに近くの駅に母親たちが来ていたので会いに行った。

それで泥棒事件が解決したことで弟達のことと2、3年したら向かいに来てくれると約束してくれたし来週の日曜日に電話してくれるといったので兄達に出られないように僕達が先に出ると約束して別れた。

僕は帰ってみんなに話して次の日曜日がすごく楽しみにしていた。

その間は嫌な事も我慢できたと思う。

そして次の日曜日約束通り電話がかかってきた。

僕達はワンコールで電話に出た。

兄達には友達からと言ったけど少し怪しんでいたと思う。

それで上から順番に代わっていったって10分くらいで電話は切った。

その時の会話は今は思い出せないがみんな涙流していたのは覚えている。

またいつもの家政婦生活が始まった。

少ししたらみんなでパン屋さんに夜お菓子とかを買いに行くようになった。

その時は父親から離れられて帰ると父親が寝ているとパターンだった。

そんな生活が毎日のように続いた。

でも時々父親の機嫌が悪いときは「毎日毎日金使いやがって」と怒鳴られることがあった。

僕達は日曜日になると父親の命令で健康ランドに行くようになった。それを嫌と断るとまた怒鳴られたりするので仕方なく行っていた。でも10回のうち2回くらいしか行っていなくて後は近くの学校でみんなが父親が日曜日ごとに賭け事をしていたのでそれに出かけるのを待って僕たちも家に帰って自由に時間を使っていた。

みんなも少しづつ成長していき少しづつだけど個人個人で行動するようになった。

それは僕からしたら嬉しい事だが僕は相変わらず奴隷生活で自由な時間は弟達だけだった。

それに弟達のが遊びに行つて少しでも帰りが遅いと僕が怒鳴られてその上探しに行かされていたのでそれが怖くていつもビクビクしながら弟達が無事に怪我しないで時間通りに帰ってきてくれるか願っていた。

そんなことが毎日だったのでストレスが溜まってひどいときは吐いてしまう事もあった。

親友のN・Hが深夜にも関わらずカラオケとかに誘ってくれてその時だけがストレス発散できた。

僕は本当に毎日毎日どんなに普通の生活を送りたかったしそんな夢ばかり見ていた。

でもそれは夢のまた夢！朝起きると現実が待っていた。

その時はどうして寝ている時にそのまま心臓が止まってくれなかったのかな？と思っていた。

朝からまた弟達にご飯食べさせて学校行かせてすぐに僕も学校に出かけるという生活だ。

それから月日が流れて僕も車の運転免許を取得する時期が来た。

我が家では17歳の終わりに近づくとも強制的に取得させられる。

僕は父親と教習所に行き申し込み手続きをして帰った。

それで本当は原付で通いたかったが免許が消滅していたのであとから父親に内緒で住民票を持って教習所に行った。

意外だったのは教習所の授業時間は父親は知らないで早い時間に出て教習所で時間つぶしたり、ゆっくり休んだり考え事する時間が出来た。

それは本当に予想もつかない嬉しい時間だった。

だから免許はいつまでも取得できなければ良いのに！とか思っていた。

でも時々父親が教習所に確認の電話をしていたのでそれは出来なかったしテストに落ちたら怒鳴られるのでいつもテストが終わって合格してから父親には報告していた。

だから父親には怒鳴られることも無かったし以外にも自分の時間が少しでも持てて一石二鳥だった。

それからもう少しづつクリアしていき嬉しい反面嫌だった。

一つ嫌だったのは教習所の先生は僕の父親のこととに対して嫌味を言うてくるのが嫌だった。

最初に書き忘れていましたが僕達は土曜日になるとご飯を食べに行くのが定番になっていたのでその時だけは父親が教習所に向かいに来る時だけは嘘付けなかった！

それであつと言う間に卒業検定になってしまつてその時だけは落ちてしまい父親にもバレてしまい最悪だった！

帰ってから父親に「何であんな簡単な試験落ちるんや！」「何十分も怒鳴られたあげく運が悪いことに長男のYが家に来ていて長男にも馬鹿にされて悔しくて涙が出てしまった。

長男はヤクザをしていたので言い方もキツイし本当に人を見下していて自分の用事で人を利用するときだけ家に来てあとは家にも寄り付かない様な人間でした。

それで数日後に再試験を受けて合格した。

受かった嬉しさより文句を言われない嬉しさのほうが大きかった。それで試験場に最終の免許を取りに行くのは急がされなかったので

何日後かに行くと父親に報告してその次の日に行った。

それで一応合格して父親には次の日に報告した。

父親は喜んでいたけど僕はこれでまた僕の用事が沢山増やされると思うと嫌だった。

早速僕には一台家の車があてがわれた。

みんなをそれで色々な所に連れて行ったり、父親の用事を頼まれたり別に車の免許を持っていたとしても自分の為に乗れることなんて一度も無かった。

僕は車の免許を取得したときに原付の免許も復活したので僕の使用は全部原付だったので車の免許を持っていたても何の意味も無かった。ほぼ毎日弟達を本屋に連れて行ったりボーリング場に連れて行ったり免許を取った瞬間から家政婦と運転手と両方させられることに毎日うんざりしていた。

それでも連れて行かないとあとの事を考えると怖かったのでその生活を送っていた。

僕は確かにあんな家に生まれてしまったけどこんな事する為に生まれてきたわけでもないと思うしもう少しだけ普通の生活がしたかった。

少しは高校生らしく友達をハンバーガー食べながらしゃべったりして時間を過ごしたり「今度遊ぼうな！」と友達たちがしてるみたいにしたかった。

教室では友達が帰りに買い物付いて来てとか話しているのを見たらうらやましかったし一番悔しかったのは友達に「連休旅行行くから行く？」と誘われたけどそれも断るしか出来なかった。

友達には「なんで家のことをしないといけないの？」と言われたけど何も言えなかった。

友達に話しても所詮分らないと思うから……………

何回か誘ってくれたのですが僕はいつ誘われても行けなかった。三回目くらいには誘ってもらえなくなった。

みんなは旅行から帰ってくるとお土産話だけ聞かされてすごく羨ま

しかった。

そんなことばかり考えてる僕は馬鹿でしょうか？あほでしょうか？でも人間は最悪な場合また最悪を呼んでくるんだなと思いました。弟達と買い物に行った帰り曲がりそこなって車をぶつけてしまったというより破壊してしまった。

でも幸い誰も怪我が無かったので良かったけど父親にはそのことに對して何ヶ月も父親の機嫌が悪いたびに怒鳴られたりチクチクいびられる様になった。

それは僕の不注意で起こした事故なので仕方ないし誰も怪我一つしなかったのが救いだっただ。

それからまた中古車で車を用意してくれてそれから自信過剰にならないように運転しました。

そうしないと自分一人だけ被害あうのは良いけど他の人を巻き込むと身内がしてきた事と同じだから……………

僕ももう3年の後半で進学決めないといけないと思うのですがあの家のことを考えると怖かった！

先生は家の事情を知っててくれたので僕は先生に寮のあるところを探してもらった。

なんと有名な害虫駆除会社が見つかり先生に話を進めてもらった。

でも問題は父親をどんな風に説得するのが問題だったけどとりあえず内定もらえるように頑張った。

結果は父親に当分報告するのを止めギリギリまで待つことにした。

その前に卒業前の最大イベント修学旅行が待っていた。

これを父親に修学旅行前ギリギリに話した。

修学旅行代は僕が家事をする前までアルバイトを少しだけしていたのでその給料をそのまま代金に回した。

それで父親にばれないように準備して父親に記憶が定かではないのですが3日前くらいに話して何とか許してもらった。

でもその間「誰がご飯作るねん」「弟達の学校の準備どうするねん」と相変わらず言われてしまった。

それでも修学旅行がすごく楽しみで我慢できた。

当日はすごく早く起きて学校に向かった。

私服だったのもっと嬉しかった。

たった2泊3日だったけど家のことを忘れてみんなと同じ高校生を満喫した。

あんなに何日も家のことを忘れて楽しめたのは母親たちが家出する前が確かこの時と同じ記憶があった。

いつも父親の顔を見てビクビクして怒鳴られないようにビクビクする時間がなくて本当に幸せだった。

ここでしっかり充電してまた家に帰ったら毎日が大忙しの生活を乗り越えないといけないから……

あつという間の修学旅行は僕にとって高校生活の中で一番の思い出になった。

修学旅行が終わりました元の生活が始まった。

あと一つ心配なのは面接に行った結果が心配だった。

毎日の生活でギリギリだったのでそんなことは忘れていた。

学校に行ったら課題は仕上げないといけないし家に帰ったらみんなの世話はしないといけないし本当に辛かった。

修学旅行に行つて楽しめたあとなのでもっと辛かった。

それからは課題をクリアしないと卒業できないので帰り残っていると父親から電話がかかってきて「早く帰って来い」とか帰りに夕食の買い物をしないといけないし帰ったら文句言われるし本当に毎日毎日ゆつくりする時間が無かった。

だからちよつと座っただけで眠たくなるくらい疲れていた。

そのおかげでクリアーできて一応落ち着いた。

すっかり忘れていたが面接に行った会社から学校に連絡があったらしく先生が「内定決定」と言ってくれた。

僕はホッとした反面父親にどんな形で報告するか考えていた。

先生も色々考えてくれたけどやっぱり自分が考えた通り報告しようと考えた。

その結果父親には「就職活動で面接に行っただけど底は寮に入らないといけない決まりだから」と言った。

僕が想像していた通り父親はそんなに誰が弟達の世話するんや」と言った。

やっぱり父親は僕を弟達が大人になるまで家政婦にして家の仕事も手伝わせて奴隷化にさせたいみたいだった。

僕の人生はどうでも良いのだと思った。

僕はそれでも気長に父親を説得し始めた。

最後は駄目だったら僕は家を出るつもりだった。

僕に最後に残された課題だった。

先生にもまだ駄目だ！とか毎日のように報告した。

でも父親は良いとは言わないがさすがに少しづつだけ気にかけてくれてくれるようになった。

最初は聞く耳持たない感じだったけど少しは話を聞いてくれるようになっていった。

父親もきつと不安なんだろうと思う。

母親が居なくなつて弟達は自分の事を自分たちでしないといけないというのは可哀想だと思つていたと思う。

その上僕が出てしまつたら誰も世話をするものがない。

僕の下の子KZは料理も出来ないし毎日出来合い物しか出さないのは父親も分かっているし弟達の世話をするようなタイプでもないし学校の準備も出来ないと思う。そうなつたら父親が今の仕事プラス全部しないといけないからだろう。

でも僕ももう解放して欲しいし2年もしたら勘弁して欲しい。

僕も人間だし赤い血も流れているのでみんなみたいに小さい楽しみでもいいから作る時間と余裕が欲しかった。

確かに逃げると言われれば逃げるには間違いないから何も言う資格は無いけど父親も少しは僕の事を同じ子供扱いして欲しかった。

そんなこと気にしていたら何も出来ないのは分かっている。

僕も少しは自分の人生が欲しかった。

自分の人生自分のものであつて他の人の物でもない。
そう思うことにした。

それから飽きずに父親を説得し続けた。
でもとうとう父親も諦めたのか許してくれた。
学校に行つてすぐに先生に報告した。

先生も自分の事のように喜んでくれた。

それから今まで怒つていた事も怒らなくなった。

でもそんな時一番下の弟Aが帰つてこなくなったのだ。

しかし家は下の弟中心で動いているので弟がいなくなったということとは僕が大怪我をするより一大事だった。

それで僕はまだ高校生なのにそんなこと関係なしに夜中中探させられた！

僕は車で！弟たちは原付と自転車で……………

それで何時間探しただろう？というくらいに僕は眠くて何回も事故しそうになりながら探していたらポケットベルが鳴つて家に電話したら「弟が見つかった」と言われて家に帰った。

弟は近くの公民館に友達と居たらしい。

僕達は腹が立つたけど父親の前では怒れなかった。

でもその何日間は弟のKZとKTに責められたりいじめられてたりしていたけど僕はそれを止めなかった。

だつて僕もしたかったから……………

家に帰つてこなかった理由は「気づいたら時間が遅くて僕たちに怒られると思つたから」という理由だった。

それを聞いた瞬間もつと腹が立った！！

それでも所詮何もすることが出来ない。

すると父親達に叱られるから……………

弟のKZとKTは父親のいないところで殴つたりしていた。

それもすぐに過ぎてまた元の生活が始まった。

僕はもうすぐこんなところを去れるという事がすごく嬉しかった。

これで誰の世話もしないで済むし誰にも迷惑かけられないし、毎日

ビクビクしないで生活を送れると思うと嬉しさで気持ちが高ぶっていた。

毎日家政婦の仕事と学校生活が過ぎて行きやっとな卒業が近づいてきた。

それでやっとな卒業式が来て僕は相変わらず家の用事で出席出来なかった。

本当に先生にお世話になったと思う。

担任K先生は色々相談に乗ってくれたり本当に感謝している。

僕にとって先生の中でも最高の先生だったと思う。

あとは研修まで家のことを頑張れば良いという気持ちで一生懸命頑張った。

僕が居なくなってもみんなが出来るように色々みんなに伝えて毎日過ぎていった。

やっとな研修日が近づいてきて父親に「本当にごめんね」と言った。

僕の人生だけど母親が居なくなると僕が一番上の兄弟だから少し申し訳なかったと思いますその言葉が出てしまった。

それで最後に忘れ物がないか確かめてあとは研修に出発するだけだった。

前の日は嬉しいのと同時にどんな生活が待っているのかな？という期待があつてあまり眠れなかった。

それで眠いのを我慢して自由への世界に向かった。

無事に研修場所に着き研修スタート！

色々研修担当の人からの規則等を聞かされて班ごとに部屋に連れて行かされた。

それでももちろん大部屋でみんなはゆっくりした。

でももう研修は始まっているので色々役割分担があり食事の片付けは僕らの班になった。

それでその日は無事に終わってすごく楽しかったのけど段々日を過ぎることに時間が過ぎることにとんでもない病気が出てきた。

なんとそれはあつてはならないホームシックでした。

それから酷かった。

みんなに色々励まされたりしてくれたり教官が「ゆつくり休んで気持ち进行を和らげり」と言ってくれて別室に他の人は研修しているのに僕だけ休ましてくれた。

それでその日は一応それで乗り切ったけど段々酷くなってきた僕は心の中で「なんであんな家に帰りたいの？」とか「あの家に帰ったらまた地獄のような家政婦扱い」とかあったのに人間は馬鹿なもので嫌な事は忘れて良い事ばかり思い出ししていた！

それで教官に何度も何度も説得してくれたけど僕も全然折れなくて結局僕がそこまで言うんだつたらと家に帰ることになった。

それでみんなが居ないときに帰る準備をしてそのまま研修所の車で駅まで送ってもらい新幹線で家に帰った。

今になつたらどうして帰ったのか分からない。

でもその時は帰りたかったのだ。

それで父親に近くの駅まで向かいに来てもらってみんなで外食して帰った。

たった3日くらいしか居なかったただけなのにすごく懐かしい気がした。

それで次の日からまた元の生活の始まりだった。

忘れていた嫌なことが一気によみがえってきた。

その時はやっぱり残ればよかったと思った。

だって父親を必死に説得して先生には寮のあるところを探してもらいみんなに迷惑をかけてしまった。

研修はたった20日間だけだったのに。。。。。

それからもちろん卒業してどこも行っていなかったので学校に行っていた倍家に居るようになってその上倍嫌なことも増えた。

父親が機嫌悪いときは怒鳴られ続けた。

それでも自分で帰ってきたから仕方が無いと思い毎日平然な顔をして生活していた。

でも相変わらず何もしていなくても八つ当たりはされるはで毎日が

今まで以上に地獄だった。

それから僕も変わっていった。

家に何も言わず遊びに行ったりしてたその時に僕には恋人が出来た。その時の恋人は伝言ダイヤルで知り合った人だった。

僕と同じ年齢で偶然にも近かった。

それで僕は昼間は絶対に自由な時間が取れなかったので深夜に会うことにした。

でもその人も深夜でないと会えないと言う事で都合が良かった。

それで最初のデートは大阪府貝塚市の二色浜の海に行った。

その人は何度も経験をしていたのでドライブして送っていくときに「どうしてエッチしないの？」と聞かれたけど僕はまだ未経験だったので本当のことを話してその日は別れた。

それから週末深夜とするようになって何回かしたときに「もう会えない」と言われた。

理由が分からなくて何度聞いても「友達でいたいから」と言うのでまた問い詰めたら家に帰る途中に声かけられて「付き合って欲しい」と言われたと言うのです。

僕はショックというより悔しくて、確かに僕は男前ではないけどこの女何様？と思ってそのまま電話をぶちきった。

それからまた元の生活に戻り毎日嫌で退屈な日々を暮らしていたときに偶然にゲイの伝言があるという聞いてその伝言を試してみた。

僕は女性にしか興味ないというわけでは無かったので男性のアソコも興味があつて一度試してみた。

するとその当時僕はまだ18歳だったのですごく色々な人から電話がかかって来た。

色々な人が僕に好意を持ってくれてすごく嬉しかった。

その時に岸和田に住んでいる人と知り合いその人は深夜に公園に僕を呼び出しそれで何をさせるのかと思ったら公園の真ん中にある屋根付きベンチに座らされてそれで早速。。。させられました。

どうしようと思っていたけど以外にすんなり。。。出来た。

それから頻繁にそこで会うようになって以外にそのときが楽しみになっ

時々ちかくの銭湯で会うようになった。

銭湯のサウナで。。。したこともあった。

それでもそんな出会いは少しずつ減ってきて最後は会わなくなっていた。

それで色々な人から電話はあったけど結局会ったのはその人だけだった。

僕はその後も何回か伝言にメッセージを入れたら次に知り合ったのはNさんと言う人と知り合った。

年齢は当時29歳で西ノ宮に住んでいた人だった。

最初はずっと電話で話していた。

僕が毎日が辛くて泣き言ばかり言っていたらNさんは僕をたくさん励ましてくれた。

お互い頻繁に電話で「今日何してた？」とかそんなつまらない事を話してお互いの事を分かって言った。

でも一つ嫌だったのがその人は僕と知り合う前に僕と同じ年齢の人と付き合っていたと聞いたときは所詮代用品だと思った。

それでもそんなことはなるべく気にしないようにしてお互い電話だけで時間が過ぎていった。

それが半年くらい過ぎて会う事になった。

Nは本当に優しくてこんなに優しい人がいるのかと思うくらい優しくかった。

それで難波駅で夜に待ち合わせして来てくれた。

それで会った時直ぐに「トイレに行きたいから付いてきて」と言われ難波の地下にあるトイレについていった。

そのあとにエレベーターで地上に上がるときに聞いた「気に入らなかったら言って！帰るから」と言ったら「嫌いだったらこんなことしないよ！」と言われキスされた。

僕はびっくりして放心状態になっていたら急にエレベーターが開い

て人が乗ってきて僕たちのことをずっと見ていた。

多分そのカップルは僕達の事を見たと思います。

そうしないとあんな不思議そうな顔をしないと思うから。

でもNさんは全然そんなこと気にしていなかった。僕もなるべく気にしないようにしていた。

それで少し離れていたところに車を止めていたのでそれに一緒に乗ってNの家に向かった。

西ノ宮の高級住宅街の中にその人の家はあった。

それで僕は難波の駅でお土産？に買った肉まんを渡した。

何も食べていないということだったので食べてくれた。

電話で色々話していたので僕が洋裁学校に通っていたことを知っていたのでNさんのお気に入りのコートを僕に持ってきて「ここ破けているので縫って欲しい」と言ってくれた。

聞くとそのコートはフリーマーケットで買ったらしくすごく気に入っていたので僕は直ぐに縫い始めた。

縫い終わったら「やっぱり上手やな」と言ってくれてすごく嬉しかった。

それで他にも見たけど破けていなかった。ので渡した。

その間肉まんを何個も食べてくれて僕にも「食べり」と口のところを持ってきてくれて食べた。

それで「一緒にお風呂入る？」と聞かれたけど恥ずかしかった。僕が「一人で入る」と言って入った。

そのあとNさんもお風呂に入って僕達はそのままNさんの布団に入り。。。をした。

すごくその時間は楽しかったし一生忘れないと思う。

お互いそのまま寝てしまつて気づいたらお昼過ぎていた。

それでお互い寝たり起きたりして夕方になったのでお互いに起きて着替えた。

それでまた難波駅に送ってくれると言ってくれたので帰る準備をした。

Nさんは僕が直したコートを着てくれていた。
ちよつと嬉しかった。

それでまた車に乗り難波駅に向かった。

その間Nさんはまだ眠かったのか運転しながらウトウトしていた。
僕はビツクリして何度も声をかけて起こしたけど帰ってもどうせ地獄生活が待っているしこんな幸せな時間が続くと思うとこのまま死んでも良いと思つてしまった。

それで無事に難波駅に着いてそのままバイバイして僕は家に駅に向かいNさんはそのまま車を走らせて帰ったと思う。

そのあとはもうすぐく幸せで何もかもが楽しく思えた。

でもまた次の日からは現実に生活だった。

それからまた電話だけの日々が始まった。

それでNさんはテキヤの仕事をしていたので僕は遊びにおいでと誘われた。

西ノ宮の神社（多分）にNさん会いに行つた。

それで10分くらいしか話できなくてまたそのまま帰つた。

難波に出て適当に時間潰して家に帰つた。

家は本当に地獄で帰りなくなつたけどそこにしか帰るところが無いので仕方なかった。

また会いたいなと思つていた矢先とんでもない事件が起きた！！！！

朝突然弁護士から電話がかかつてきて「Nさん知っていますか？」

僕が「知っています」と言う、「Nさんが逮捕されました」と言われ朝早かつたのもあり何かなんだか理解できなくてきちんと話を聞いたら友達同士で出かけ先でその中の一人がコンビニで強盗してその人がNさんの車に走ってきてその時に追いかけてきた人達に「Nさん達も仲間です」と言つてそのまま一緒に逮捕されそのまま拘留された形になつた聞いた。

僕はビツクリして何か手助けというか少しでも役に立たないかと思ひ尋ねたら「何も無い」と言われ「無事に早く帰つてこられるように願つていてください」と言われました。

僕はもうショックで何も手に付かなくてどうしていいかと思っただけどとりあえず手紙は出せるらしくその弁護士から住所を聞いて電話を切った。

それで早速手紙を書き始めたけど意外と書くことが無かった。だってまだ知り合って間もないし会ったのは2回だけだしNさんについて何も知らなかった。

僕って一体何をしたいのかも分からなくなってきて本当に辛かった。何も役に立たないしと言ってNさんの親に僕が恋人ですと言いにいくわけにもいかないし……

何も出来ないまま毎日過ごしていたらNさんの友達と言う人から電話がかかってきてそれでNさんの近況が聞けた。

それが無かったら何も分からないまま生活していたと思う。

色々聞けた！体調とか毎日何をして過ごしているのか？が分かった。それから僕も手紙を出して家に来た手紙等は父親が勝手に開けてしまうので高校があつた貝塚の郵便局に郵便局止めにしてもらって取りに行くことにした。

それで手紙等は送るときには監視員等が見るので書けないのは分かりますが来た返事は「漢字が少ない」「文章がおかしい」とかいうものばかりだった

それに最後には「幸せを見つけてください」とか書いていてすごくショックだった。

僕ってそんなレベルだったの？と思った

でも「監視員の目とかを気にして本当のことを書けない」と自分に言い聞かせてNさんの友達の電話と手紙の返事だけを励みに毎日過ごしていた。

そんな生活が何ヶ月が続いた時面会に行く事になった。

Nさんの両親に連絡して面会の許可を貰いました。

それで前の日はほとんど眠れなくて朝出てワクワクしながら面会に向かった。

場所は三重県の津市に刑務所だった。

本当はまだ刑が決まっていなかったので拘置の形だけど場所は刑務所だった記憶がある。

受付で手続きを済まして待っていると名前を呼ばれた。

その時に手荷物はロッカーに預けないといけないので持っていていたロボット型のレコーダーをばれないように持って行った。

顔を見た瞬間涙が出てきて最初の最初の方は言葉が分からなかったけど。

直ぐに話し始めた。

時間が決まっているので色々話したかった。

僕はどこかで「好き」という言葉を待っていた。

でもそんなこと漢詩の横で言えるわけが無い。

それで「頑張れ」などの言葉をもらうことにした。

その言葉を言っていくれるように仕向けて言ってくれた瞬間もう一度言って欲しいと言ってくれるようにお願いしてその時に録音ボタンを押して録音できた。

嬉しさと安心さであとは色々話しているうちに時間が来たので監視員から「終わりです」と言われ最後に「元気だね」とか言って面会室を出た。

それで自分の荷物を持って帰る途中思わず泣いてしまった。

悲しさと会えた嬉しさで。

でもこれから先は会えない。

いつ出てこれるかも分からない状況で僕は待っていてられるか怖かった。

また一人になる恐怖は誰よりも分かっているから。

そんな時にあの手紙の内容を思い出した。

「幸せになってください」「いい人見つけてください」言葉を思い出したときもつと恐怖心が出た。

それでもNさんから出る手紙の内容は「友達が励ましてくれるから」などの内容が出てくる。

僕もそれからは少しずつ変わってきた。

伝言にメッセージを入れて色々な人と知り合った。

でも結局一回も。。。をしなかった。

伝言で知りありった人の中で堺に住んでいるHさんと人と知り合った。

その人はすごくいい人だったけど宗教に入っていて僕を頻繁に誘ってきた。

僕はH君と会うのは楽しかったけど宗教に誘われるのは嫌だった。嫌いとかではなく興味が無かったから誘われても入らなかった。

H君と会ううちに大阪に住んでいるA君を紹介された。

その子は僕にすごく似ていてなぜか直ぐに友達になれた。

もちろんA君も宗教に入っていたが家族が最初から入っていてA君自体は宗教に興味なくて僕と会うときは全然勧誘とかもしないし話も出さないので良かった。

それからH君抜きでA君とだけ会うようになった。

先ほど良く似ているといったのは家の環境がすごく似ていて父親が暴力振るったり家族の中、家の中に自分の居場所が無かったり全部が全部似ているとは言えないけど考え方とかまで似ていて何を話しても同じ答えが出た。

それでお互い同じゲイなので包み隠さず話すことが出来た。

僕には親友が当時いたがその子にも話せなかった事が全部話せた。頻繁に難波で会うようになってお互いお金持ちではなかったのでコンビニでジュースとか買って公園で色々な事話したりして時間を過ごしていた。

でも結構遅い時間になったら帰らないといけなかったので後ろ髪引かれる思いで帰った。

それで電話とかも頻繁にしてその当時はまだポケットベルだったのでお互メッセージを入れたりしていた。

会ったときとかは難波もウロウロしていたけどよく新世界を歩いていた。

その理由はお互い同じ家庭環境で毎日精神的にギリギリだったしそ

の当時は今みたいにセキユリティーが無かったのでビルの屋上とかに上がったので「本当に辛かったらここから二人で飛び降りような！」とか他の場所に行っても「ここで死のうな！」とかお互い本当に耐えれなくなったら一緒に死ねる場所を探していた。

それが僕たちに来る精一杯なことだった。

それにお互い誰にも話せなかったが伝言とかに「僕は今お金に困っています。どなたか良かったら。。。えんをお願いします」と入れて売春していた。

もちろんそんなことは話せなかったがお互いはそういうところまで似ていた。

それはお互いしようと言った訳ではなく少し前からしていました。

二人ともまだ22、3歳だったので何人も電話がかかってきた。

お互いに客が付いた日はポケベルとかで連絡しあった。

A君は良い人に当たって原付を買ってもらったりしていた。

僕もなかなか良い人に当たらなかったけど最後に会った人は良い人だったし。。。の初体験の人だった。

その人は無理やりとかはしないで優しくしてくれた。

僕は帰り際にお金を出してくれたけど結局電車代だけもらって帰った。

不思議にその人からは高額取れなかった。

時には同じ相手に当たった事もあったけど別に何も思わなかった。

僕は自分の分身だと思ったいたと思う。

それから僕らはそのバイトを続けた。

大した儲けにもならないし人にも話せないバイトなのに僕はいつも誰かと居たかった。でも威圧する人間ではなく一緒にいてたのしい人が良かった。

でも僕はいつの間にか髪の毛を伸ばし始めた。

ゲイになりたかったのではなく女になって男に好かれたかった。

それからA君と会うことも無くなった。

家のことを真面目にすることになってほとんど自分の時間が無くな

つてきて夜は直ぐに寝てしまい土日関係なしに自分の時間は無かった。

髪の毛を伸ばし始めて僕は化粧もするようになった。

それで夜家事を済ませて眠いのを我慢して二色の浜にあるパークタウンという昼間は工場地帯で夜はナンパ通りになるところに2日に一回くらい原付で行っていた。

その時にプリティーウーマンという映画が自分の中では一番好きで一番憧れていた。

僕は男だがあんなシンデレラストーリーを憧れて誰かこんな腐りきった場所から連れ出してくれる想像をしていたから。

僕は高校は洋裁学校に行っていたのでプリティーウーマンでジュリアロバーツが着ていた露出し過ぎの服を自分で作り着て行っていた。もちろん家から原付で走っていくのでその途中でもみんながくるまから僕のことを驚いた表情で見ていたのがすごく分かって何か分からないけど気持ち良かった。

昼間だと男と分かってしまうが夜だったのでほとんどバレなかった。それに男は来るまで来ていて僕は原付だったのでもし追いかけられても人と自転車しか通れない裏道などを走って逃げていた。

そこは夜は釣りをしに来ている人が多かったので車道とは対になっていない歩道もたくさんあったし隠れるところもたくさんあったので逆に車で行くほうが危険だった。

だから車が通る横の歩道に止めて車が通ると手を振ったり「バイブー（バイバイ）」と言って振り向かしたりストレス解消をしていた。それが本当に習慣になってしまつて冬と雨の日以外は平日もほぼ毎日行っていたし特に人が多いときは土日だったので土日が一番楽しかった。

その間にも髪の毛がどんどん伸びてきていたし一応パークタウンの為にだけにダイエットもしてお腹も出ていなかったたので顔を別にしたらガッチリした背の高い女に見えていたと思う。

実際横に並んで話していてもバレなかったし女と思っていたので大

切にもしてもらえた。

それがもう一つの快感で知り合った人は僕に。エ。して欲しいと言われて顔もなかなか男前だったのだとしたしそれが二つ目の快感だった。

でも怖いこともあつてゴルフクラブを振り回されて殴られそうになった事があつてその出来事だけはパークタウンで一番怖かった。

パークタウンで一番嬉しかったのはそこで彼氏が出来た。

最初無効が2人でこちらがもちろん一人で話していたらいつの間にかその人とだけ話していてもう一人の人も分かつてくれて車に乗って僕たち2人きりにしてくれた。

それで相手は携帯持っていたが僕はポケベルしかなかったので番号だけ伝えてその日は僕も帰った。

その人は堺市内に住んでいる警察関係の仕事をしているといっていた。

それからデートをすることになったのですが問題は昼間だとバレてしまう可能性が大ということだった。

ほとんどは僕が色々な言い訳をつけて夜会うようにしてもらっていた。

だから何処も行けなくてドライブだけでしたが僕にはその方が都合よかったし楽しかった。

別に騙すつもりはなかったが結果的には騙したことになるしいつバレルかもドキドキしながら週に一度会っていた。

それがすごく楽しみになってデートが終わると2キロ体重は増えるけどデート日までに3〜4キロ落として勝負していた。

でもとうとう「お昼に会おう」と言われた。

会えないとは言えないし「良いよ」と言つて準備した。

それで会う日を楽しみではなく恐怖心だけを持ってその日を迎えた。その日はヒゲもしっかり剃ってメイクも一段と念入りにして向かった。

約束の場所で待っていたら来てくれて運転代わって彼氏の運転でド

ライブした。

でも僕はいつばれるかドキドキして全然楽しくなかった。

早く人のいないところに行かないと怖くて怖くて何も話は聞いてなかったけど「ホテルに行こう」と言ってそのままホテルに向かった。駐車場から部屋に直接入れるところに探して入った。

やっと落ち着けた。

早速僕が作っていった弁当を二人で食べて色々な話をして時間を過ごした。

僕はもちろんエッチは出来ないのとお互いそんな雰囲気になったときに彼氏が未経験と言っていたので「最初は口だけで」と理由をつけた。

だからエッチ目的というよりは二人きりになりたくて入った形だった。

そんな夢のような日が一ヶ月くらい過ぎたと思うが突然出先でポケベルが鳴って電話したらパークタウンで彼氏と一緒にいた人が電話に出てその人から「もう会いたくない、分かれたい」と言われ何を言っているのか分からなかったけどきちんと理由を聞くと僕がパークタウンに居たのを見た！というのだ。

でも彼氏と知り合ってからパークタウンに行った記憶もないのに誤解と言いたかったけどでもいつかは男とばれるかその前に別れれないといけなかったので素直に言われた言葉を納得して分かれた。

それからまたパークタウンに通いつめる日々が続いた。

でもそれ以来彼氏とかを見つける為ではなく男の人と知り合うためと。。。する為だけにした。

結局そんなことは叶わないのは百も承知だし自分自身が傷つくのが嫌だったから。

行く回数が増えるために益々服装も過激になり行動も過激になり男が一番集まっているところを走って相手を引きつけ追いかけてくるようにして追いかけてきたら逃げまくって最後は車が入れないところに入り込んで逃走することがすごく楽しかった。

それでも時々優しい人話の合った人と近づき過ぎないように横に並んで話したりしてその当時はその場所が僕にとって一番落ち着ける場所だった。

他人からしたらいい場所ではなかったが僕にしたらその場所が親友たちとカラオケ、遊びに行くの次に大切でたのしい場所だった。

家では太陽が出ている時は自由な時間が無かったので夜みんなが寝たりしてからが僕の自由な時間だった。

それ以外は最初に書きましたが弟達が遊んでいても僕は家事をして本当に自分の時間が無かった。

だからこそ僕にはその夜の時間が必要だった。

それが無いと本当に自分自身精神的に崩壊していたと思う。

これを読んでいる方は「そんなこと無いよ!」とか「他にもそんな人沢山いてる」とか思っている人もいると思いますが本当に僕の家は別でした。

例えば学校から帰ってきてまだ2、3分しか過ぎていないのに怒鳴り散らされるし冬はファンヒーターの灯油が入っていないと怒鳴られたり殴られたりお風呂が沸かすのが遅いと怒鳴り散らされるし夕食の準備も遅かったら怒鳴られるし健康に気を使ってメニューが野菜中心にしたら「弟達を殺す気か?」と怒鳴り散らされて本当に毎日怒鳴られない日は無かったくらいでした。

僕も人間だし弟達と同じ父親の子供なのに僕は他の弟達と違って家政婦扱いで辛かった。

父親はヤクザも怖がるような人間だったのでドラマで観るヤクザ映画の怒鳴るシーンの何倍も酷かった。

まだドラマのヤクザのほうが全然怖くないくらいでした。

でもパークタウンに行くのと嫌なことも悲しいことも寂しいことも何時間か忘れられたし親友たちとカラオケに行ったりするときよりも気を使わないのでその空間その時間が一番好きだった。

僕はその場所の男の人を馬鹿にしているつもりだったが本当は大切だった。

それに目立つことで人に見てもらおうことで「僕はここに居る、僕も人間、」ということも分かって欲しかった。

でも寒くなると行けなくなるのでその間は我慢してストレスも違う形で発散するようにしていた。

弟たちも段々成長していき日曜日はお昼の2時間くらいは自分の時間を持てるようになった。

でもそんな短時間なんてアツという間に過ぎる。

でもすごく嬉しかった。

そんな生活が4年くらい続いたのか忘れましたが次男夫婦が家に帰ってきた。

里帰りではなく済んでいたところで借金まみれになって帰ってきた。僕にしたら母親たちが家を出て直ぐに誤解が解けたといっても僕にしたら憎らしい存在だ。

家は2世帯住宅で使っていないほうの世帯に荷物を全部入れて住みだした。

次男の嫁Mは今まで何も無かったように生活をしだした。

僕も同じ敷地にいて憎らしい思いをぶつけても仕方が無いと思い僕も何も無かったような顔と態度で生活し始めた。

次男の嫁M達が帰ってきたことで家の中の雰囲気がいぶん変わった。

次男の嫁Mの子供が2人いて下の子Rが特に父親のお気に入りの子で僕から見てもかわいい子だった。

上の子もかわいいけど子供なのにしっかりしていて友達と遊ぶのに毎日が忙しかったみたいだ。

下の子はまだ保育園にも行く年齢では無かったので一緒に買い物に行ったり父親と遊んだりしていた。

その間は僕もボーとする時間が出来たしRがいてるだけで父親の機嫌がすごく良くて父親も良い相手になって良かったと思う。

それから僕らの家族と次男夫婦とで住んでいた。

次男の嫁Mと僕は交代に家事を始めたのですごく僕も助かった。

次男は家の仕事を手伝って借金を少しづつ返していた。
そんな生活が続いた。

父親もRとかがいてるので一番下の弟Aも父親があまり構わなくな
った。

僕からしたら弟達のことですらでも怒鳴られる事が少なくなった方
が助かるので嬉しかった。

でも相変わらず週末の外食だけは父親の命令で行くのは変わらな
かった。

その時は父親の愛人と孫も連れて行くのが定番だし職人も全員連れ
て行くのでいつも大人数だった。

でもそれが父親の家族サービスだから仕方がなかった。

そんな生活が続いて次男夫婦のRが保育園に行くことになった。

だからまた昼は父親と次男の嫁Mと僕の三人になった。

でも相変わらず次男の嫁Mと僕の家事は変わらないが父親はその時
から愛人の家に泊まるようになった。

普通は腹が立つと思うのですが僕は父親が一日でもないのは嬉
しかった。

でも他は何も変わらないが僕からしたら約一年ですいぶん前進した
と思う。

それでRが保育園に通いだして少しして次男の嫁Mが借金返すのも
含めて仕事をするといい出した。

次男の嫁Mは看護師の資格を持っているので近くの病院で働くこと
になった。

5男は原付に乗って自由な時間を過ごしているし4男は家業を手伝
っているが何も覚ええない自分から何も動かないしその上自分がいな
いと家業が駄目になるとか勘違いしているしそれなのにしっかり給
料だけはもらって偉そうにしているしそれで満足しているからほっ
ておこうと思った。

次男夫婦が帰ってきてから良い方向に向いていて僕もアルバイトを
することになった。

N・Hに紹介されて工場で働くことになった。

その前に父親にどう言おうか考えていたけど次男の嫁Mに「そのまま言った方が良いよ」と言われてそう言った。

意外にそれで許可をもらった。

最初は続くかな？と心配だったけど頑張って働くことにした。

もちろん夕方からの仕事だったので次男の嫁Mが間に合わないときは僕がRを向かいに行ってその後準備をしてそのまま出て次男の嫁Mが帰ってきたら作ってもらおうというパターンが多かった。

母親たちが出て行く前は少しですがアルバイトはしていましたがいなくなつてから辞めないといけなかったので5年以上ぶりに働いたのですごく楽しかった。

僕は声が大きいので仕事内容のことも話してると課長から「。君、声大きいで！そんなんだつたら考えないけない」と言われました。

僕は別に辞めてもお金に困る生活をしていなかったなので「良いですよ！どうなつても！」と言つたら辞めさせられることはなかったが僕は別に生活に困っているわけではないのでどちらでも良かった。仕事内容は以外に僕に合っていて細かい作業だったのですごく楽しかった。

それに仕事を終わつた後にみんなでワイワイガヤガヤ話するのが楽しみだった。

一緒に働いていた人もいい人で良かった。

もちろん父親に怒鳴られる事が無くなつた訳ではないが毎日がすごく充実して

それにその仕事していた季節は暖かかったので相変わらず夜になるとパークタウンに出動していた。

家のことを考えなければ本当にこの時期が一番家が好きだった。

しかしまた不運が立ち込めてきた。

何ヶ月がアルバイトをしていたが仕事が無くなりN・H達とも会わなくなつてきてその時にN・HにTが僕と「カラオケに行くのが嫌だ」とか僕って「嫌な事言う」とか「怖い」とか言っていたと聞いた。

た。

僕は信じられなかったけどN・Hとは小学校4年から友達であり親友と思っていたのでN・Hは親友だと思っていたので嘘言うわけないと思いそれを聞いてすごくショックだった。

N・Hが「だからカラオケとかも誘わんとこ！」と僕に言ったけどそんなことまで考える余裕は無かった。

それからTから電話がとかポケベルとかかかってきていたけど全部無視していた。

「そんな人間と話す必要は無い」と思っていたから。数日しても何回もかかってきていたので僕は諦めて（多分電話だったと思います）出た。

それで「N・Hがこんなこと言っただけど本当？」と聞いた。友達と思っていたからこそ聞いた。

するとTが「そんな事言ってないよ！！」と言った。？と思った。

それでN・Hはこんなことも言っていたとか聞かされたこと全部言ったら「私全部言ってないよ！」と言われてもとおかしくなった。今度はTから僕が「私の事色々言っていたとN・Hから聞いた！」と言われて僕も？と思い「そんなこと一言も言っていないよ」と言った。「言っただけというより返事するまで聞くから思っていないけど仕方なく返事しただけ」と言いました。

お互い「へっ？」となつて会って話すことにしました。

すると僕のことを「何考えてるか分からないとか危ない子とか」色々言われてたあげくN・Hの母親と下の姉にも同じ事言われたそうです。

僕は怖くなってきました。

もしそういう事を過去にしたりしていたら言われても仕方ないけどそんなこと一つもしていないのにどうしてそんなことされるのかもふしぎでなりませんでした。

僕はもう地獄に突き落とされた気分でした。

本当は聞かない方が良かったのかもしれませんが聞かなかつたら一生そんな風に言われ続けられていたと思うと鳥肌が立ちました。

Tが話してくれたから僕も悪いと思いながらも全部N・Hから聞いたことをTに話しました。

その話した内容もTは何も一言も言っていなかったそうです。

それなのに僕は親友だと思っていたのでそれを信用してしまい本当にTには申し訳ないと思いました。

でも一つ困ったことにTはN・Hと身内なのでどうなるかが心配でした。

僕の責任でTとN・Hが仲たがいしてしまう形になってしまつから、それにどれだけ憎み合つても身内をやめる事は出来ないから、どうしよう？と考えていたらTが「本当の事分かつてよかったわ！TもN・Hのこと大切やつただけどあの子は所詮あんな性格やで」と言われ嬉しい反面辛かつたです。

でも僕は思いました。

N・Hは八方美人で誰かのところに行くたび会うたびに違う子の悪口言っているんやな！と。

それからはずつとTと会うようになりました。

書き忘れていましたがTは女の子ですが僕はTのことを女と見るより大切な親友とTに叱られるかもしれないませんが同姓という感覚でした。

お互い悩み事とか楽しかったこととか色々話しました。

でもなかなかN・Hのことが立ち直れなくていつも思い出すたびに涙が出ました。

そんな時 motto 最悪なことが起きました。

弟達が僕のことを邪魔にしてきたのだ。

四男は下二人の弟を炊きつけて僕をいじめ始めたのだ。

前まではそんなことでは何も思わなかったし反撃していた僕だがN・Hのことから弱くなっていた。

親友の次は兄弟？と思った。

次男夫婦に裏切られたときはショックだったけど所詮母親違いの兄弟だからと思っただし次男の嫁Mも血が繋がっていないからとどこか諦められたけど今度は違った。

母親も父親も同じなのにどうして？と思うとすごく怖かった。

でも考えてみたら家事をする次男の嫁Mと車の運転をする四男といったら僕は必要ないのが分かった。

以前は次男の嫁Mがまだ居てなかったので家事も運転もする僕がいなくて駄目だったけど家に同じことが出来る人間は2人もいないということだった。

それで最初は我慢して気にしないようにしていたけど弱っていたのもあって弟達に色々言われたり有ること無いこと言われたりされたりしてもう我慢の限界だった。

それで家を出ようと決めた。

それから気が楽になつて四畳の部屋にいたので自分の荷物をまとめて要らない物、持っていけない物を全部コンテナに捨てに行つて僕の物は持つていく物意外は何も無くなった。

それでTに相談したら「家において」とTもおばちゃんも言ってくれたので行かせてもらった。

それで夕方にポケベルが鳴つて次男の嫁Mからだつたので家に電話をして次の嫁Mに「どうしたん？帰ってこないの？」と聞かれたので「帰らない」と言つてそのまま電話を切った。

一番申し訳なかったのは確かに怒鳴られたり殴られたりしたけど父親が僕のことを最後まで守ってくれた。

長男に色々いじめられたりしたけどその時も長男に言ってくれたみたいでそれからそれから言われなかったしあの家でと考えたら父親かな？と思う。

その日からTの家に住ませてもらう事になりすごく楽しかった。もちろん僕は住ませてもらっているから自分で出来る限りさしてもらった。

Tの妹のYちゃんとも仲良くなつたし弟のTとも怖霽囲気だったけ

ど直ぐに仲良くなれたし本当の兄弟ではないから仲良くなれたのかそれとも本当の兄弟がこんな風に仲良いのか？分からないけどみんな仲良くしてくれた。

Tのおっちゃんも本当に仲良くしてくれて僕は今まで心底からあんなに大切にしてもらったのは初めてで今でもあの時の事を思い出したら嬉しくて楽しくなる。

毎日Yちゃんと一緒にご飯食べたたりお菓子食べたたり弟のTがいてるときは一緒にしゃべったり僕が作ったご飯食べてくれたり嬉しかった。

それでTの家に住ませてもらって楽しかったというか思い出に残っていることは沢山ありますがTとパークタウンに行って色々な人と知り合ったことかな！と思う

でも少し調子に乗りすぎてTと2人締め出されたことがあった。

その時は本当にTには申し訳なかった。

僕の責任でTが叱られてしまっただけ僕は何も出来なかったし僕も分まで叱られて本当に辛かった。

だからそれからは本当の気をつけた。

だってもし僕が両親だったら女の子が深夜に外に出て明るくなつてから帰ってくるなんてしていたら心配で眠れないしやっぱりTの親と同じことをしたと思う。

それが親としての気持ちだと思ったから。。。なるべく出かけるときは昼間にした。

もちろん昼間はパークタウンに人はいないのでパークタウンには行けないけどその代わり色々な所に行った。

それにおっちゃんが休みのときに和歌山の黒沢牧場に行ったことが思い出に残っている。

みんなで羊に直接触れるところに行つて触ったり、みんなでワイワイ言いながらご飯食べたたり本当に楽しかった。

あんな楽しい思いをしたのは何年ぶりだっただろう。

それから何日過ぎたか分からないがTは携帯電話を買ってすごく楽

しそつだつた。

僕は最初は興味なかったけどＴの見たら自分も欲しくなつてきてメーカーは違うけどＴに着いて来てもらつて携帯を買つた。

それで知り合う人に電話番号を教えてかけてきてもらった。

お互い色々な人に教えたのであまりにかかつてきて誰かわからない事があつた。

Ｔの家に住ませてもらつていている間に一生分の楽しい思い出を作らせてもらったというより作つてくれた。

それで一ヶ月が過ぎようとしたときにＴがファンのコンサートに行くことになつた。

その時におつちゃんから。も家に帰つたほうが良いよと言われた。僕は家に帰れないけど「はい」と言つてしまった。

でも本当にＴ、おつちゃん、妹のＹちゃん、弟のＴ、おばちゃんのは感謝しています。

Ｔがいなかったら僕はどうなつていたか？

この一ヶ月は本当に幸せだつた。

母親たちが家出して初めて人間扱いされた気がする。

それに本当に大切にしてもらつた。

感謝してもしきれないほど感謝しています。

それから僕は手荷物だけ持つて後の荷物はＴの家に置いてもらつてそのまま一言だけお礼を言つて出た。

そのまま泉佐野から岸和田までをウロウロしていた。

その間に伝言に売りメッセージを入れていた。

でもＴの家にいて携帯を持つてから何人かと知り合つたのでその人に電話してホテルに泊まつた。

もちろん相手は僕のこと女と思つていた。

だから全部は出来ないが出来る限りばれないようにエッチした。

それで夜そのまま泊まつたり公園のベンチで寝たりコインランドリーで寝て目が覚めたら警察が着てビックリということもあつたり、健康ランドに泊まつたりして3日くらいはその付近をウロウロして

いたが夜パークタウンのベンチで寝ていたとき伝言を聞いてかけてきてくれた人がいてその人が大阪に居るということで僕は貝塚の施設の駐輪場に原付を止めて大阪に出た。

その時代はまだ髪の毛が長くて腰に服結んでいても普通だったので目立ってないとはいえないが別に何にも無かった。

それで待ち合わせのホテルに行つて驚いた！

過去に売春していたときに知り合った人だった。

その人も僕と会ったときに「君か！」と言われてご飯おごってもらつてその後部屋に行つて。。。して僕はお金だけもらつてそのままホテルを出た。

そのまま僕は難波に居座ることにした。

だつて地元に戻つても家にも帰れないし結局どこにいても同じだから。

それだつたらまだ大阪に居た方が良いかな？と思ひいたが肝心なことに寝るところが無いので色々探していると西成（新今宮）に行つたら安ホテルがあつて安いところは1日800円くらいであつて僕は夜ということもあつてそこに飛び込んだ。

それで料金を払つて部屋に行った。

部屋は寝るだけには十分だった。

それからそこでの生活が始まつた。

僕は先の不安を考えたが家に帰つてまた家政婦扱いされたあげく八つ当たりされて最後に邪魔者にされることを考えたらここに居た方がマシだと思つた。

それで昼間は難波に出てアメリカ村とか御堂筋とかをウロウロして時間潰したり色々な物を見て楽しんだ。

お金はまだあつたが少しでも多いほうが良いと思ひ伝言に入れても電話かかつてこないしだからテレクラに電話して援助交際相手を探して会つた。

でも僕は男だから援助交際をすることは出来ないので前払いでお金をもらつて直ぐに「ちよつとトイレに行つてくる」と言つて紙袋に

旅行のパンフレットを入れたダミーを相手に預けてそのまま逃げた。それで何人が騙して少しは生活できるくらいは稼いだ。

でもそれ以外は他にすることも無く毎日安ホテルで過ごしていた。アメリカ村も行き過ぎて段々見るところが無くなったけどあの雰囲気を楽しかった。

僕もまだ若いんだなと思った。

何日過ぎて突然おばあちゃんの事を思い出した。

家に居た時はとく連絡してくれていたのに忘れていた。

おばあちゃんに会いたくなって「明日、会いに行こう」と思い次の日に早速おばあちゃんの家に向かった。

家といっても震災で住んでいた所が傾いて仮設住宅に住んでいた。

思い出しておばあちゃんに会いに行った。

僕はおばあちゃんのに母親たちの事を聞くつもりではなかったからとりあえずおばあちゃんが住んでいる仮設について全部同じ建物なので分からなくなって近所の人に聞いておばあちゃんに会えた。

おばあちゃんはやっぱり母親達の話題には触れなかった。

僕も触れなかった。

それでその日は泊めてもらい僕の悩みとか聞いてくれた。

おばあちゃんは僕が家を出た事を家の人から聞いていて知っていて心配してくれてた。

嬉しかった。

初めて身内で心配してくれる人がいた。

父親は利用の次に心配だから！

色んな物を食べて遅くまで話して僕も満足した。

それで次の日にそのままそこを出た。

大袈裟だけどこれが僕の人生です

僕は一体何のために生まれてきたのかな？

もっともつと苦しんでいる人とかは沢山いてるので「甘い！……！」と叱られますが僕にとっては本当に辛かったです。

高校生の一番楽しい時期、思い出が残る時期に僕には家事をしている思い出、父親に怒鳴られてる思い出、長男とか長女にチクチク嫌味言われている思い出、友達に「可哀想」と哀れみうけてる思い出しかないのです。

僕の責任で僕のだらしなさが原因なら仕方ないですけど何もこの原因を作ったのは僕ではないのに原因を作った姉Hは結局自分が殴られるのが嫌で母親たちと一緒に出てしまった。

その後家に残っている兄弟の中で上だった僕が姉Hのケツ拭きをさせられて本当に辛かった。

母親の役目、姉の役目を僕がしていたし本当に毎日どうして？生きているのか分からなかった。

もし僕がこんな人生歩んでいなかったらどんな人生待っていたのだろうか？

一人一人基準が違うけど普通の人生だったらどんな生活していただろう？

僕にも恋人が出来て結婚して子供も出来て平凡な生活を送っていたのかな？

僕の子供ってどんな性格、顔していたのかな？

家族で公園行ったりお出かけしたりしていたのかな？

子供の授業参観行っていたのかな？

そんな生活は普通の人生送っていた人も送るとは限らないですが送れる可能性はあったと思います。

今はそんなことばかり考えています。僕は馬鹿でしょうか？

僕も悪かったのかもしれないけど僕は送れなかった。

こんな泣き言ばかり書いてどうもすみません。

長々とこんな面白くもない話を読んでくださってありがとうございます。ごめいしました。

ここに書いたことはすべて本当のことです。

書き忘れているところはあると思いますが嘘はありません。

こんな人間もいたということを知って頂けただけでも嬉しいです。

たくさん誤字脱字があったと思いますし意味の分からない内容もあったと思いますが

許してください。

それでは本当にありがとうございました。

（後書き）

読みにくかったと思いますが最後まで読んで頂いてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2926c/>

私の人生

2010年11月19日08時13分発行